

高尾山報

令和6年5月号



新緑の高尾山で四百名の華やかな行列は長く続く

四月二十一日(日) 春季大祭



三月二十八日、真言宗醍醐派総本山醍醐寺第百四世座主 壁瀨宥雅下が、大原弘敬執行長、仲田順英執行、百目鬼幸秀法務課長と共に高尾山に御来山されました。

壁瀨下は、昨年十二月に新たに座主にご就任され、本年一月二十二日に醍醐寺において入山式を終えられました。

当日は当山僧侶がお出迎え申し上げる中、高尾山麓の不動院に於いて、当山貫首と和やかに懇談されました。

壁瀨宥雅下御来山

総本山醍醐寺百四世座主
大本山三寶院門跡
真言宗醍醐派管長

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(143)

紫藤の露の底に
残花の色
翠竹の烟の中に
暮鳥の声

〔和漢朗詠集〕
源相規

〔散り残った紫色の藤の花が、露にしつとりと濡れて色あせないでいる。翠色の竹がぼうつと霞んでいる中から、鶯の声が聞こえてくる。〕

時の流れは早いもので、五月五日に二十四節気の「立夏」を迎えました。木々の新緑が青空にくつきりと映えて、辺りには爽やかな風が吹きわたっています。水を張った田んぼには蛙が賑やかに鳴いて、初夏の訪れを告げているかのようです。冒頭の漢詩は、立夏を過ぎて残る春らしさを歌ったものです。日に日に夏めきつつもなお色鮮

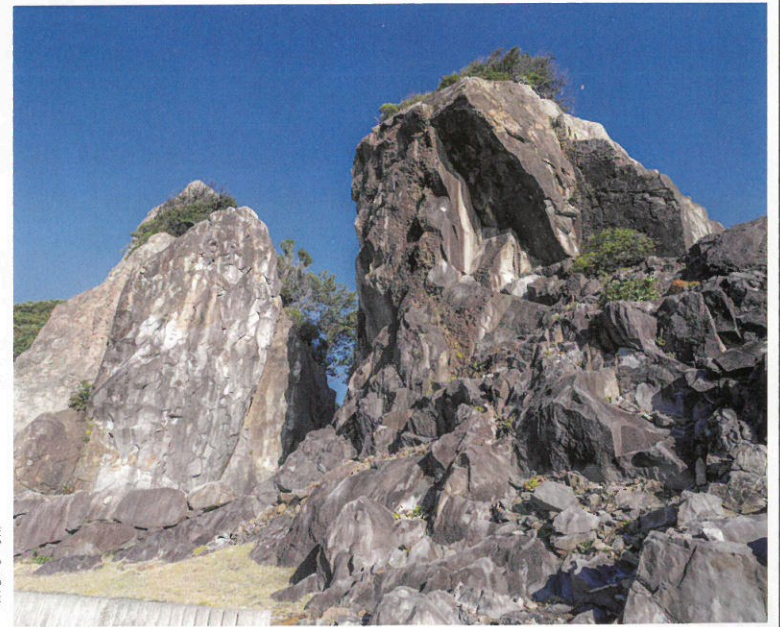
やかな藤の花や、春霞の奥で囀る鶯の声に、去りゆく春の「余韻」を感じているのでしよう。『徒然草』一五五段に「春はやがて夏の気を催し（春はそのままた夏の気配を用意し）と見えるように、春と夏の境目をはつきり分けることはできません。「余春」という言葉があるように、初夏の中にも春の「余情」（味わい）が含まれているのです。

この時期は新年度の慌ただしさから少し解放される一方で、その疲れから身体に不調が表れやすいつい心も波立っています。春の名残を探し求めるとき、時にはゆっくりと立ち止まってみませんか。

心の「余裕」（ゆとり）は、穏やかな日常への第一歩となるものでしょう。さて今回も、全国津々浦々に残る弘法大師空海（七七四〜八三五）の伝説を垣間見つつ、お大師さまの「余薫」（時を経ても残る恩恵）を感じてみたいと思います。

先月号では、佐渡の「影ノ神」伝説を取り上げました。佐渡については、例えば『曾我物語』に「東は安久留・津軽・外の浜、西は志岐・対馬、南は土佐、北は佐渡」と見えるように、東の青森、西の長崎、南の高知とともに、日本の北の果てとも認識されていたようです。そこで今月号では、こうした四方の境界から南に位置する四国の土佐（今の高知県）を取り上げてみます。

四国といえは、平安時代の流行歌を採録した『梁塵秘抄』には「四方の霊験所」（全国の霊験あらたかな神社）として「中略」土佐の室生戸



若き日のお大師様が修行された室戸岬の海岸

讃岐の志度の道場とこそ聞け」（土佐の室戸、讃岐（今の香川県）の志度の道場と聞いている）と歌われています。ともかく古くから人々の信仰を集めていた海沿いの霊場です。

若き日のお大師さまも、四国での修行に励まれました。『今昔物語集』には「阿波国（今の徳島県）にある「大滝嶽」に行つて虚空蔵の法を行つと、空から大きな剣が飛んできて、土佐国の「室生門崎」（室戸岬）で求聞持の行を観念していると、明星が口に入った」（『今昔物語集』）と語り継がれています（『法の水茎』百二十三）。

虚空蔵菩薩を本尊として修する「記憶力を増大するための修法」です。空から大剣や明星（金星）が飛び来たつたのも、お大師さまの祈りが通じたことを示す霊瑞（めでたく不思議なるし）であったのでしよう。

「明星」に注目すれば、仏教を開かれたお釈迦様も、若き日の苦行の中で「明星出づる時、廓然として大悟す。無上正真道を得」（明星が現れたとき、心が大空のように晴れて迷いを断ち切った。真理を悟ることができた）と説かれています（『修行本起経』など）。

お大師さまの明星も、暗い洞窟（御蔵洞・御厨人窟）の中で一心に祈つた末に感得した一条の光（光明）であったことが想像されます。

お大師さまは明星を海に向かつて吐き出されました。すると光は海に沈んでいきました。今も海中にあります。闇夜に海を眺めると、消え残った光がキラキラと輝いているのです。

その場所は南の方向に見えて、遠くは補陀落を眺めることができます。高い岩が聳え立っていて、それは遙か彼方にある鉄圀山（仏教で世界の中心にある須弥山をめぐる最も外側にある鉄の山）を限りとする大海原です（中略）

お大師さまは和歌を詠じました。

法性の
室戸といへど
我がすめば
有為の浪風
よせぬ日ぞなき

（『壺囊鈔』卷十一）
海の彼方にあるという「補陀落」とは、観世音菩薩が住むという南の霊地を意味します。この海域については、先に見た

『梁塵秘抄』に「土佐の船路は恐ろしいや」（土佐への船旅は恐ろしいよ）として「中略」御厨の最御崎 金剛浄土の連余波（お大師さまが修行した御厨人窟のある最御崎（室戸岬）、金剛頂寺のあたりに寄せ連なる波よ）と歌われているように、いつも激しい荒波が立ち騒いでいました。

お大師さまが詠まれた「法性の」の歌については以前述べましたが（『法の水茎』百二十四）、荒波の辛苦は「有為の浪風」（つらい無常の波風）となつてお大師さまにも吹き付けていたでしょう。

お大師さまの祈りは明星となつて現れ、虚空からお大師さまを通して、補陀落を望む海底へと飛び去りました。お大師さまが唐（中国）から投じた独鈷杵がとどまったとも伝わる土佐国は、荒波に耐え、今も明星の「余耀」（輝き）がきらめく聖地と言えるでしょう。（栃木北部教区普濟寺）



有喜苑における柴燈大護摩供



大本堂内で御詠歌を奉詠



絹太鼓保存会による豪快な太鼓の音が響く



稚児と共に歩みを進める佐藤貫首



地元の浅川中学校吹奏楽部による演奏

新緑萌えるお山の稚児練行

春季大祭奉修

四月二十一日(日)



健やかな成長を願い誕生仏に甘茶を灌ぐ

子供達の健やかな成長を願う高尾山春季大祭が、本年はめでたき御縁日に重なり、華やかに奉修されました。最初に犬山執事長をはじめ山内の僧侶、山伏が高尾山慶賛会の皆様と浅川中学校吹奏楽部と共に山麓の表参道をケーブルカー清滝駅まで練り歩きました。

その後、山上の十一丁目茶屋で華やかな衣装に着飾ったお稚児さんや八王子消防記念会、高尾山御詠歌講、氷川神社獅子舞保存会、苦小牧市より訪れた「風の会」、ボーイスカウト及びガールスカウトの皆様と合流して、四百人を超える荘厳な稚児練行となりました。

途中で絹太鼓保存会による奉納太鼓と八王子消防記念会による梯子乗りの出迎えを頂き、薬王院の大本堂において子供たちの無事成長を祈り御護摩修行を厳修致しました。



八王子市の姉妹都市である苦小牧市より訪れた「風の会」と献上ホッキ貝を運ぶボーイスカウトの皆様



八王子消防記念会による勇壮な梯子乗り

観音菩薩の宗教

77

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音(その15)

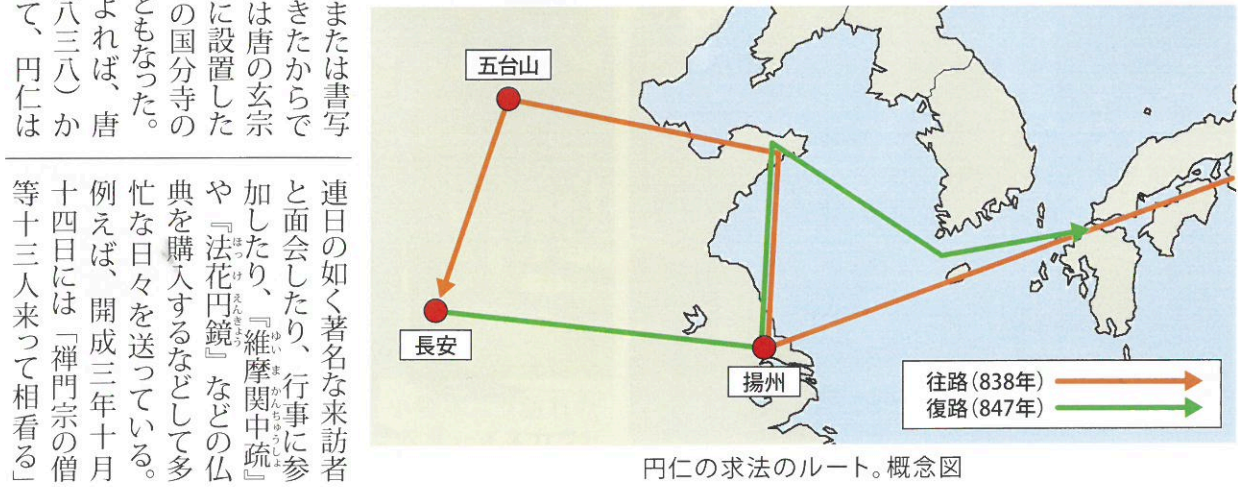
円仁入唐の目的は天台巡礼であり、それは天台僧の彼にとって当然のことであった。円仁に先立つこと三六年前、師たる伝教大師最澄は天台山国清寺に詣でて学んでおり、円仁が天台学の疑念を解明することは、師の遺業を成就する意味もあった。国清寺は天台大師・智顛が創建した、天台宗の開創の寺院にして根本道場である。その後、の国清寺には最澄が大乗菩薩戒を授かった道邃をはじめ、天台教学の泰斗が住しており、そこで修学することは円仁の熱望であるのみならず、比叡山からの期待でもあった。このことについてライシャワーは「中国は極東の仏教国にとってイン

ドに次ぐ聖地として憧れの対象であり、学問僧として中国へ渡ることには、円仁にとっては彼の師最澄の足跡を辿ることであつた。またそれは、「彼にとっては、単なる名誉ではなく重い重責となつた」と評している(ライシャワー、前掲書、六六頁、拙稿前号参照)。

かかる円仁の熱望と義務感とは裏腹に、当時の唐の決まりでは外国人が許可なく州を越えて移動することは禁止されていた。ことに「制して外国人の濫りに寺家に入るを許さず」(円仁『行記』承和五年八月三日条。足立喜六『訳注・塩入良道「補注」『入唐求法巡礼行記』1、平凡社・東洋文庫、一九七〇年、

六頁。以下『行記』とされているから、円仁の清国寺巡礼には幾重もの規制が横たわっていた。しかも遣唐使船で円仁が到着した揚州から天台山のある台州に行くには、江南東道の潤州・台州などの公験を取得する必要があつたため(中田伸一「円仁の入唐求法について―天台山へ行けなかつた理由」『小山工業高等専門学校研究紀要』第三十四号、二〇〇二年七月、九頁)、その手続きや審査は煩雑で厳しいうえ事務作業も緩慢であつた。円仁らは規則に則り、揚州府に天台山巡礼の許可証である公験の発給を申請した。『行記』が詳しく述べるように、円仁は遣唐大使の藤原常嗣を通じて催促するなどして発給を待つたが、願いは叶わなかつた。この時の円仁の思いについてライシャワーは、「中国巡礼の主目的が果たされないことは全くの失望で

あつた」と述べている(前掲書、六九頁)。しかしながら結果から見ると円仁の失望は、災い転じて福となすがごとき幸運が出来た。公験を待つ八ヶ月ものあいだ、居住を許された揚州の開元寺を拠点に、円仁は多くの名僧・碩学と会い修学できたうえ、種々の



円仁の求法のルート。概念図

とあり、「筆書して」歛談している。筆書とは筆談すること、書して云ふ(開成四年一月十九日)とも記され、円仁が唐語の会話は不得手だったことが察せられる。それにも拘らず円仁の深い漢文の素養により、教理的な談義から雑談まで広く唐人と交流できたことは興味深い。開成四年一月十九日には天台山禅林寺の僧・敬文が来訪し、円仁は彼から『四分律南山鈔』や『天台法花經止観』を受学している。

円仁および日本の天台宗にとって重要なのは、この時期に揚州で円仁が多く密教に触れ学んだことである。『行記』の同年同月二二の条に次のようにある(前掲書、八二頁)。「崇山院の持念和尚全雅に就いて『金剛界諸尊儀軌』等数十巻を借写す。此の全和尚は現に胎蔵・金剛両部曼荼羅を有し、兼ねて作壇の法を解す」。また、同書の二月五日の条に「和尚

全雅來たり、房裏に如意輪壇を作る」とある。全雅は恵果阿闍梨の門下・弁弘の弟子といわれ、円仁に師資相承の法をもつて密教の修法を種々授けたとされる(『行記』補注一、二、一五頁)。上記に「借写」とあるのは、全雅が有していた儀軌や曼荼羅を借用し、かき写したことを指す。また「作壇」とは、本尊を祀り仏具や供物を配して壇を作ること、本尊の違により種々の違いがある。壇の原語はマンダラ(Mandala)で、絵画化されたものに限らず、土や砂などで作る壇などがあり、広く諸仏を祀る空間の視覚的表現を指す。導師は壇に臨んで印を結び陀羅尼を唱えて供養する。供養が終わると「破壇」といつてその壇を壊すのが本来の作法であつた。後には寺の本堂の奥に本尊を祀るために設えたひと際高い須弥壇や、家庭の仏壇にも「壇」の字が用いられ、そこでは破壇

しない永続的な設備を指すようになった。全雅は作壇の法、すなわち作り方、祀り方を会得していたということである。ことに如意輪壇を作ることから、如意輪観音菩薩を本尊とした壇を作つて円仁に示したことが察せられる。『行記』の注釈者である仏教学者の塩入良道はこの条の注記で「円仁は揚州で得た『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』一卷、『観自在菩薩如意輪念誦法儀軌』一卷、『如意輪菩薩真言註義』一卷を將來している」と述べている。

円仁は揚州で天台山行きの許可を待ち続けるが、結局その望みは果たせなかつた。本来なら入唐して天台山を訪問した後、請益僧として一年前後で帰国する予定であつたが、計画が想定外となつて在唐は九年三ヶ月に及んだ。天台山巡礼の夢破れた円仁は、予定を変更して文殊菩薩の聖地である五台山に向かうことにした。

しかし円仁は五台山でも、日本未伝の仏典を書写するなど予想外の幸運に恵まれた。また、五台山では最澄以来、未解決だった教義上の問題「延曆寺未決州条」がすでに解決していたことを知り、さらに大花嚴寺(大華嚴寺)で『法花經(法華經)』と『止観(摩訶止観)』の二講を受け、ることにより「実に五臺山大花嚴寺は是天台の流といふべし」(開成五年五月十七日)と述べている。五台山訪問により、凶らずも円仁は天台山巡礼に勝るとも劣らぬ成果を得たことになる。

五台山を後にした円仁は、唐の都の長安への旅に出た。長安における円仁の成果は数多いが、特筆すべきは大部の仏典の蒐集である。このうちここでは如意輪菩薩に関する典籍を見てもよい。円仁は入唐の記録である『行記』とともに、求得した典籍を記した『日本国承和五年入唐求法目録』『入唐新求聖教目録』などの目録を残している(小南沙月「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の成立過程―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要―史学編』第14号、二〇一五年)。それらの目録所載の典籍を研究した小南沙月によれば、円仁は長安で『観自在菩薩如意輪念誦法儀軌』を得ている。このうち後者は四度加行の如意輪念誦法次第の原本であるとされている(慈覚大師円仁将来目録の研究―『入唐新求聖教目録』の概要―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要―史学編』第16号、二〇一七年)。真言密教の僧侶となるには四度加行と呼ばれる修行をしなければならぬが、円仁がこれら如意輪観音の儀軌を請來したことに、天台でもその修法が整備されていくことになる。



満開の桜の中で柴燈護摩供が厳修された



遥拝社にて高尾山を訪れる皆様の安全をお祈りしました

四月十三日から五月十九日にかけて開催される「若葉まつり」に先立ち、開催の無事と高尾山へ訪れる方々の安全を願い、「登山者安全祈願祭」が執り行われました。
満開の桜のもとで伊勢丹立川支店の関係者や高尾山商店会の皆様によるお練り、飯縄権現遥拝社御宝前にて佐藤貫首導師のもと、高尾山へ訪れる人々の安全を祈る法楽をささげられました。その後、ケーブルカー清滝駅前では柴燈護摩供を厳修し、来山者の安全と共に、世界平和、被災地の復興を合わせて祈念致しました。

高尾山若葉まつり 高尾山登山者安全祈願祭厳修 四月六日(土)



星野家三代の句碑を前に高士先生(中央)と玉藻の会員の皆様

俳人の星野高士先生(俳誌『玉藻』主宰)が、玉藻の会員の方と共に来山され、境内の天狗像脇にて「三代句碑建立記念法楽会」が執り行われました。
この場所には、明治時代の俳人・高浜虚子の次女である、星野立子様と椿先生、高士先生の親子三代に渡り、それぞれ次の句碑が建立されております。
春風にのり 大天狗 小天狗 立子句碑
春風や 森羅万象 瑞々し 椿句碑
富士道といふ 古道にも風光る 高士句碑

三代句碑建立記念法楽会 四月十六日(火)



誕生仏に甘茶を灌ぐボーイスカウトの皆様



お釈迦様の真身骨が祀られている仏舍利塔での法要

四月七日(日) 日本ボーイスカウト東京連盟八王子地区各団が高尾山上有喜苑仏舍利塔広場に参集し、お釈迦様の生誕を祝す花まつりが当山貫首導師のもと盛大に開催されました。高尾山仏舍利塔には昭和六年(一九三二)日本ボーイスカウト連盟の前身である少年団日本連盟が「健児の仏舍利」としてタイ王室より拝受した釈尊真身骨が安置されております。
翌四月八日には同仏舍利塔に於いて当山僧侶による釈尊降誕会法要を当山貫首導師により厳修され、参列する多くの御信徒が春の花で飾られた花見堂に奉る誕生仏の立像に甘茶を灌ぎお釈迦様の御誕生を祝いました。

花まつり(釈尊降誕会) 四月七日(日)・八日(月)



蛇滝(左)と琵琶滝(右)で滝行の安全を祈願する



高尾山には、蛇滝と琵琶滝という二つの水行道場があり、毎年四月一日に、一年間の安全を祈願する開瀑式が行われます。

開瀑式厳修 四月二日(月)

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

53

十八世秀神11 護摩檀中の大名(上)

文化六年(一八〇九) 成立の「江戸田舎日護摩講中元帳」(以下「元帳」と略す)を、現実世界とパラレルであった信仰世界が凝縮された小宇宙と形容した所以は、信徒として大名、旗本・御家人、豪商から中小の商工業者、

富農層、在村文化人、一般農民に至る、当時の社会を構成する広範な身分・階層の人々が包摂されていることにある。

神仏の前では人皆平等とまではゆかないのが当時の仕組みではあったが、少なくとも神仏が身分や



文化元年『武鑑』から (国立国会図書館デジタルコレクション)

職業の別を問わず信仰を集めている様相が看得られるのである。

江戸の檀家記載

「元帳」に記された当初の筆跡約一、二〇〇名の内、約三〇〇名は江戸の在住者である。江戸のページは上段・下段の取次関係がなく、よって薬王院の使者が一軒一軒札を届けたものと考えられる。江戸の特質として屋号を名乗る商家が多くを占めることと、姓を冠した武士層も数多いことが一目瞭然である。江戸のページにも上段・下段の区分はあり、上段に記されていたのが大名家である。高尾山の檀中の内、上位の社会階層に属し、有力檀家と呼べる人々として、まずは大名家に注目してみよう。

寛政九年(一七九七)に祈禱所再興を果たした紀伊徳川家は「紀伊中納言様」とページ上段に記され、記載の順路からすると現在赤坂離宮となっ

ている中屋敷への配札であったことがわかる。唐銅五重塔再建の施主であった久留米藩有馬家は以前に言及した通り出てこないが、それ以外にどのような大檀那があったのだろうか？

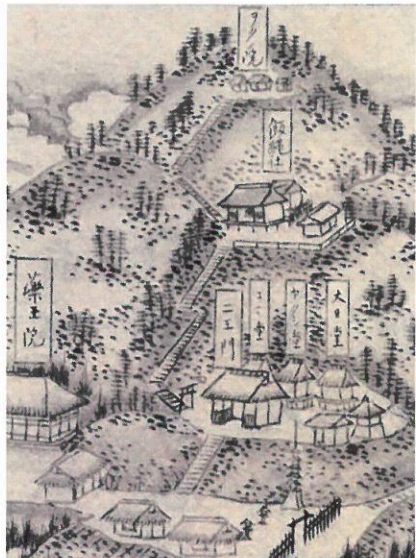
福井藩松平家

「元帳」に見える大名家の内、紀州家に次ぐ格式となるのは、福井藩松平家である。徳川一門の中では御三家に次ぐ親藩と呼ばれる存在である。同家は「元帳」作成時の記載の最後にあり、挨拶の書状案文や掛り役人の名、御札の形状など記載は詳細で、他の大名家とは別格の扱いであったことがわかる。「越州中將様」とあるのは「文化七年逝去」という後筆から、隠居の身であった先代重富、「松平越前守様」が三代当主治好ということになる。また、世嗣仁之助、三人の息女の名も見える。

越前松平家は、徳川家

康の次男で中世の名門結城家の家督を継いだ秀康を始祖とする。江戸中期にいったん血筋が絶えるが、八代將軍吉宗の三男一橋宗尹の子が後嗣に迎え入れられ、一代藩主重昌となるも早世、その弟で跡を継いだ二代が重富となる。

どのような縁で同家が高尾山の檀家となったかについては示唆に富む事実がある。先代重富の室お致の方は、高尾山一六世秀憲に深い帰依を示した紀伊徳川家八代重倫の妹である。その母清信院は根来寺中興で知られ、四つ違いの兄ともども神仏への崇敬篤い雰囲気の中で育つたと考えられる。お致は重倫の高尾山への傾倒が深まる以前、宝暦一年(一七六一)に嫁いでいるが、兄の帰依を聞き知つたものだろうか。大名家の寺社信仰には奥向きが関わる傾向があり、越前松平家の場合も、この家族関係が護摩檀家となる契機であったのでは



仁王門の左手脇に見えるのが二ノ鳥居(『新編武蔵風土記稿』から・国立公文書館デジタルアーカイブ)

ないか。越前家の記事の冒頭には「文政八歳十二月卒去につき断りあひ成りそうろう」と記されている。この年(一八二五)は治好の没年であるが、このことは、配札にお致を生母とする治好自身の意向が係わっていたことを推測させる。なお、以降の動静は全く不明である。

姫路藩酒井家

越前松平家に次ぐのが二五万石の姫路藩酒井家である。江戸前期には幕府の重職を担った譜代の名門である。三河譜代である酒井家は徳川家康の家臣酒井雅楽頭忠世を

藩祖とする。忠世は家康の嫡男秀忠の家老を勤め、老中・大老として三代家光の政権を支えた。家康の関東入国の後、上野国(群馬県)を所領として代々受け継いだが、忠恭の寛延二年(一七四九)に前橋から姫路へ移封した。その二代後が寛政二年(一七九〇)に跡を継いだ「元帳」当時の藩主忠道である。

「元帳」へは「稲荷堀酒井雅楽頭様御屋敷内岡本昌庵へ御札上る、中奉書台付五本入台付」と追加の記載となつている。献上物の内容からこの札は岡本宛ではなく、当主忠道に対するものである

ことがわかる。記載は余白にあり、「元帳」成立の文化六年よりは後に札を届けたことになる。

幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』は飯縄権現社の石段前にあつた二ノ鳥居の額「飯縄大権現」を染筆したのが忠道であると記している。編さん物である地誌の記載は口承が裏付けなく収録された可能性もあり、直ちに史実とは認めにくいものだが、「元帳」という現用の帳簿へ配札の記載があるとなると、にわかには信憑性が高まる。そうすると、額への染筆や護摩札配札の契機が気になる。これについて推論するにはあまりに材料に乏しいが、記載の仕方と周辺情報から探ってみよう。

酒井家の記載は余白に書き込まれ、なおかつ抹消がされている。配札継続の見通しがあればページを改め書き直すことも考え得るので、このことは配札が急なこと、一回ないし比較的短時日の

内に途切れたことを推測させる。

大名家への配札窓口が当主の側近筋や奥向きの家政筋であったことは紀州家の事例からわかる。ところが姫路侯に札を取次いでいるのは医師の岡本昌庵である。このことは、札の依頼が病氣治療に係る可能性を感じさせる。紀州家重倫の時も、医師による治療の効なく、病氣平癒の護摩依頼をした感がある。酒井家の場合も医師が関与するということとは、同様なケースではないか。

忠道が額を染筆した時期は「元帳」成立と相前後する頃の可能性もある。文政五年(一八二二)の上梓とされている『風土記稿』多磨郡之部だが、編者が実際に現地を調査したのは文化二年(一八一四)から三年にかけてとされており、その時期にはすでに忠道の額が存在したことになる。忠道の護摩札依頼の理由を病氣とすること自体が推測

の域を出るものではないが、さらに想像をたくましくすれば、その病氣平癒が染筆の動機というのにはちよつと出来すぎだろうか？

先述の通り酒井家の記述にはバツテンの抹消がなされている。定期的な祈禱関係には至らなかつたようだが、同家に係わつては後日譚がある。幕末の頃、姫路酒井家の遠い支流であった旗本酒井忠積は、高尾山二二世秀盛が江戸出府の折には宿所に進物を届け、また自邸に訪問を受ける間柄であったが、やがて宗家へ養子に入ることになる。高尾山と姫路藩の奇しき縁と言うよりない。

註 重富の没年は文化六年が定説だが、「元帳」作成時は薬王院側に把握されておらず、あるいは薬王院が逝去を知つたのが文化七年ということか。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

おはなし散歩道 翔くんと髭の鍾馗様

柏市 木村 研

翔くんは、一年生になったのに、まだ、夜一人でトイレにいけません。お母さんが田舎のおばあちゃんに、「ほんと、困っちゃうわ」といつたら、日曜日、さっそく、おばあちゃんから荷物が届きました。「これ、翔くんによ」「ぼくに。何だろう?」翔くんが、包みを開いてみると、人形が入っていました。

「わー。こわい」翔くんは、お母さんの背中にかくれました。「何だ。怖いのか?」お父さんが、悲しそうな顔をしていました。「だって、そんな髭もじやの人形、こわいよ」翔くんは、またお母さんの背中に隠れました。「これは、鍾馗さまといって、端午の節句に五月人形と一緒にかざると、病気になるように守ってくれるし、受験の神さまなんだって」お父さんは、おじいちゃんの手紙を読みながらいいました。「ほんと?」「ほんとよ」お母さんも、「翔くんが、夜も、一人でトイレに行けるようになるんだって」と、いいました。「でも、いやだよ。ぼく、そんな人形、いらないよ」「そうか……」お父さんは、「男の子らしい人形なんだけどなあ。それじゃ玄関にでもおいとくか」と、人形を玄関の靴箱の上に置きました。翔くんは、いやだなあと思っただけ、もう、何にも言えなくなりました。

翔くんは、夜、ベットに入ってから、こわい鍾馗さまの顔が、ずっと頭からはなれませんでした。*

翔くんは、夜中に目が覚めました。「……お母さん。トイレ」といったけど、お母さんはいません。一年生になってから、一人で寝るようになったからです。「おしっこ、おしっこ、おしっこもれちゃうよ」翔くんは、パジャマの前を押さえて飛び起きましたが、急に足が止まりました。だって、廊下になると、玄関にあの髭の鍾馗さまがいるからです。

「お母さん。お父さん、トイレに行けないよ」翔くんは、泣きそうになりました。トイレに行けなくなるのもつとつとおしっこがたまつて、お腹がパンクしそうになってきました。「も、もれちゃうよー」我慢できなくなつて、

灯りをつけて廊下に出ると玄関の方から、変な声が聞こえてきました。「だ、だれ?」翔くんが聞くと、「よかった。翔くんだね。ああ怖かった。わし、暗いところが嫌いなんだ。だから、翔くんの部屋においでくれないか」と、鍾馗さまが、泣きそうな声でいいました。翔くんは、びつくりしました。でも、何だか可愛くなつて、いいよ、といいました。*

次の日、「朝よ」と、翔くんを起こしに部屋に入ってきて来たお父さんとお母さんが、鍾馗さまが翔くんの部屋にあるのを見て、びつくりしました。「どうしたんだ?」「鍾馗さまを連れてきちゃったの?」「うん」「大丈夫か?」「大丈夫だよ」翔くんは、鍾馗さまをみて、ニツ、とVサインを作りました。「まあ」お父さんとお母さんは、顔を見合わせて不思議そうな顔をしました。(挿し絵・小出 茂)



「だ、だれ?」翔くんが聞くと、「よかった。翔くんだね。ああ怖かった。わし、暗いところが嫌いなんだ。だから、翔くんの部屋においでくれないか」と、鍾馗さまが、泣きそうな声でいいました。翔くんは、びつくりしました。でも、何だか可愛くなつて、いいよ、といいました。*

高尾山 季節散歩

和風月名
皐月
「さつき」
五月の異名は皐月が特に知られています。「皐」という文字には、田植え、または神に捧げる稲という意味があります。また大元の意味は同じですが、早苗を植える月という意味で「早苗月」が省略されて「早月」という別名があります。

今月の風物詩
運動会
五月は晴天の日が多いことから、十月と並んで学校で運動会が行われます。最近では熱中症対策や他の行事との兼ね合いから五月開催が増えているようです。この時期に学校の近くを通ると、学生たちの元気な声が聞こえてくるかもしれません。

健康登山者投稿作品 季節の絵手紙 「春をはこぶ甘い香り」 八王子市 柄谷 怜子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

二十八段 笑顔でいつも感謝の日々を

日々生きること、他人と会話し助け合うこと、当たり前と捉えていることでしょ。しかし、滅多にない無いもの、「有難いもの」として価値を見出すことで、本心から感謝の心を持つようになり、笑顔で人生が送れるようになることでしょう。

「のぼり旗」奉納のお願い



高尾山では、不動院境内や有喜苑等に、皆様方より「のぼり旗」の奉納を受け付けております。「のぼり旗」には、奉納者の御芳名を記入致します。奉納できる本数に限りがありますので、ご希望の方は早めのお申し込みをお勧め申し上げます。尚、お子様、お孫様のお名前でも承ります。一本 三千元 申込・問合せ 〇四二一六六一二二五(代)

いろは天狗の落とし文 40

迷惑かけず
正直生きて
人生実り
有るものに

自分の気持ちに正直に生きること、他人に迷惑をかけるような生きること、両者は時に背反する生き方でしょう。周囲と協調することは必要なことですが、過度に自分を抑制するといつか破綻してしまいます。時には気分転換して気を緩めてみましょう。

いけばなの心 ⑤0

華道教授 佐藤 宗明

今回は「燕子花」を使用した生花正風体をご紹介します。

かきつばたは古来日本人に好まれ、池坊でも四季を通して生けられている花材です。この作品は『真(ま)つすぐ上に伸びている部分』の葉を長く扱うことで涼し気な雰囲気表現しています。

すが、この作品は左側のお花がある部分『副』と中心にあるお花の部分『真』を分ける様に生けることで群生して生えるかきつばたの雰囲気を一作品で表現しています。しばらくすると菖蒲園も各地で開園する時期となります。ぜひ皆様も実際の「あやめ」や「かきつばた」、菖蒲を見におかけください。



花材：燕子花 (カキツバタ)



高尾山報助成金志納者	比企郡 朝比多美枝
御芳名(順不同・敬称略)	足立区 中山 恵司
練馬区 豊橋 勝行	伊勢原市 佐々木 晋介
八王子市 石坂 和夫	横浜市 高橋 洋子
川崎市 大島 一将	邑楽郡 大塚 秀一郎
太田市 奥山 馨	さいたま市 水岡 健二
新座市 彰山 粧麗	八王子市 松村 延子
東大和市 中川 彰久	行田市 渡辺 宏
小平市 関 道雄	秩父市 大越 幸子
小平市 大野 重信	世田谷区 上田 浩憲
八王子市 鶴野澤 信之	比企郡 小鷹 健一
富士吉田市 渡邊 学	相模原市 比留間 榮子
台東区 佐伯 明恵	八王子市 福島 元行
武蔵村山市 川島 しず子	角田 光一郎
八王子市 杉本 章吉	高崎市 徳田 宏晴
足立区 吉野 良江	品川区 青木 晃雄
富士見市 栗原 正明	立川市 堀江 和男
昭島市 中村 美代子	仙台市 佐々木 陽子
長岡市 桑原 康年	さいたま市 菊地 知恵子
八王子市 江添 節子	富岡市 大手 邦裕
陸前高田市 小林 信雄	高尾山健康登山者一同
大村市 久保 富美子	
和歌山市 白山 義晃	

人事異動(五月一日付)

総務兼任用度部長 原田 明仁
 信 徒 部 長 山本 憲佳

第二百二十二回 信徒峰中修行会

六月一日(土)～二日(日)

【信徒峰中修行会】を、六月一日から二日にかけて開催致します。

高尾山に広がる大自然全体を道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身を任せ、古来より伝承される修行を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？

滝行や夜明け前に行われる回峰行、また講習会や有喜苑での柴燈大護摩供等を実践致します。

但し、舗装されていない暗い山道を一定のペースで歩きますので、体力に自信のある方のみ御参加下さい。

また、集合時間は厳守となります。遅刻の場合には対応致しかねますので、その旨ご了承下さい。

※当日の天候や状況等によって行程変更や中止となる場合がございます。

※申込締切後、詳細を示した要項をお送りします。

日程表	
一日目	二日目
10:00 高尾山麓不動院 集合・受付	2:45 起床
10:30 開会式	3:30 出立
11:00 昼食	3:40 神変堂法楽
11:30 出立	3:45 回峰行
12:00 滝行	4:45 山頂法楽
14:00 回峰行	5:30 朝勤行
16:30 かしき谷にて法楽	6:00 朝作務
17:00 坊入	7:00 朝食
17:30 入浴	8:00 諸堂参拝
18:30 夕食	9:45 法話
20:00 就寝	10:45 昼食
	11:45 柴燈大護摩
	13:30 閉会式
	高尾山麓不動院
	14:00 解散

申込締切 五月二十四日(金)

参加費 二万五千円

定員 四十人

集合 高尾山麓不動院

服装 運動着

持参品 ヘッドライト

弁当 (初日昼食分)

軽食 (二日目未明分)

雨具 (カッパ・ポンチョ)

洗面用具、タオル

寝間着、筆記用具

リュックサック

*お持ちの方は、念

珠や錫杖をご持参

下さい。

お申し込みについて

左記のいずれかの方法でお申し込み下さい。

- ① ハガキに必要事項(郵便番号・住所・氏名とふりがな・年齢・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(電話番号・名前・続柄)・アドレス)の「有無」を明記してお送り下さい。
- ② QRコードからお申込み下さい。



●お車で越越しの際には山麓祈禱殿駐車場をご利用下さい。ご相談のある方は時間内(九時～十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。

西国四十九薬師霊場巡礼(3) 厚木市 荒井 一雄

夏遊法界寺 留守といふ 小僧なぶらん 山桜 芭蕉

別格醍醐派 夏、法界寺(日野薬師)に遊ぶ 真言宗醍醐派の別格本山に 阿弥陀堂を拝す...

拜阿彌陀堂 西方極樂浄土の宝池に憩へば、 『国宝・阿弥陀如来坐像』の 安置さるる

浄土の池寶 『国宝・阿弥陀堂』の 重厚なる歴史が感ぜられ、 何気なくさり気なく 建つその姿がまた格別...

廟像定國藏



登山だより

六月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

七日

神変祭

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

十日、二十一日

弁天秘供

十九日

納札供養柴燈大護摩供

(十三時折袴殿広場)

二十二日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十五日

御詠歌勉強会

(十時山麓不動院)

二十八日

奥の院開扉供養

(十時奥の院)

三十日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

三十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権

現様の日々の御加護に感謝

し、沢山の御供物を捧げて

御本尊様威光倍增の為、御

供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し出

下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修

御志納金 一口三千円以上

毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分
// 11時00分

午後0時30分
// 2時00分
// 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

高尾山の昆虫

トラフシジミ

175

トラフシジミ(虎班小灰蝶)

という可憐な蝶がいて、春と夏に

二回出現しますが、春型の方が

綺麗だと言われます。

翅の表面は美しい青藍色であ

り、翅を閉じると僅かに青味を

帯びる白い紋と灰褐色の紋とで

縞模様になり、まさに虎の斑紋

を思わせる雰囲気があります。

シジミチヨウの仲間によく見られ

るオスメスでの斑紋の違いは、本

種では微少です。

また、この虎模様は春型の個体が顕著で、夏型

は明瞭ではなくなります。特に珍しい種ではない

ものの、行けば必ず会えるという感じではないので

見つけると嬉しくなる蝶ではあります。

本種は翅を閉じて止まった状態が、名が体を

表わす意味で十分ながら、翅を開いた時の青味が

強い美しさが一際目立ちます。以前取り上げた

ムラサキツバメ同様、開翅の瞬間を撮影するのは

容易でなく、葉上でも地面でもいいから、翅を

広げて止まってくれと願いつつ、そうそうこちらの

思うようにはなりません。

運良く陽光の中で開翅に出会うと、青藍色の中

に裏の虎模様が透けて見え、トラフであることを

主張しています。

(文松島 孝 撮影 齋藤 万人・上村 雅昭)



高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行
等により御縁を結ばれた
御信徒様に高尾山報を
送っております。

引き続きご愛読され
ますよう、皆様方の助成
金御志納をお願い申し上
げます。



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>
下記のQRコード
から高尾山薬王院
のホームページに
アクセスできます



発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山秀康
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円